



俺は大手商社○○グループの社長の次男坊だ。

兄貴はクソ優秀な奴だから俺が家を継ぐ必要はない。

だから俺は有り余る大金を使って好きなように生きてるし、
今後もしようするつもりだ。

周りの連中はそんな俺をクソドラ息子とか言っているようだが、
そんなのどうでもいい。知ったこっちゃねえ。

「さて今日は何すっかなーって・・・あれ？」

若いメイドが屋敷にいやがる。



昔俺が散々若いメイド達にセクハラしまくったせいで
ウチの屋敷のメイドはババアしかいねえはずなのに・・・。

しかもなかなか可愛いし、エロイ身体してんな……。よし、今日はあのメイドで遊んでやろう。



「おい、そのメイド」

「……はい。私のことでしょうか」

「そうだ」

「お前、名前なんていうの？」

「アリスと申します」



「ふーん。」

「じゃあアリス、お前は今日から俺専属のメイドにしてやるよ」

「専属……？それはどういう……」

「そのままの意味だよ。お前は俺の言う事に絶対服従だ。いいな？」

「は、はあ……」

「じゃあ俺の部屋に來い」



「……これはいつたい……」

「うるせえ大人しくしてろ。お前は俺に絶対服従つつたろ。」

「……かしこまりました」

「よし、スカート捲れ」

「……」

黙って従うアリス。こいつはいい。

「お前でつけえ乳してんなあ」

ムギッ

ぽん



「。。。。」

グッ...

グニャッ

リ

まじで何にも抵抗してこねえなこいつ。。。。
普通のメイドならめちゃうくちや暴れんのに。。。。



アリスの太ももにちんぽを突っ込んでみた。

「ッ……ッ」

「へへっ気持ち悪いか？」

セクッ

グニョッ

リッ

ぬいっ

~~~~~





「いえ……。」

「いつマズミで俺の言いなりじゃねえか。」

「そうかよw

「じゃあ好き放題お前の身体使わせてもらっぜw」

「つかこいつの太ももとまんこの肉ぶにぶにで……ヤベッ……。」

アッ  
アッ

ヌ  
プッ









「ッ……ふ——。」

「……」

「ふ、これで終わりじゃねえからな？」

「ドッ……」





「雑用メイドのくせにバカでけえ乳しやがって」

「俺が有効活用してやるよ」

「……はい」



ぐちゃっ



「マジでお前らしい従順だなw」

「.....」

「ま、いいやw」

あゝヤベツ♥

風俗でもなかなかねえレベルのパイズリだわ」













「ふっっ♥♥  
顔汚しちまったなw」

ゲロ  
ゲロ  
ゲロ

「……構いません」

「……」





「・・・ナマでブチ込むぞ」

「かじごまりました」

「お前さあ・・・嫌じゃねーの？  
それともなんか企んでるわけ？」

「・・・」

「んだよ・・・」









「すっげえ締まりいいなお前w」

「ッ・・・♡」

「乳もマンコも名器すぎw」

「お前メイドじゃもったいないねーわw」





「ナカに出すぞ」

ズ  
ン  
ッ  
バ  
ン  
ッ

ズ  
ン  
ッ

「……」

バ  
ン  
ッ

ド  
キ  
ン

「無言は同意ってこととで  
オラツツ……!」









「無口だけど身体はちゃんと反応してんじゃんw」

ド  
ク  
ッ

ド  
ク  
ッ

「あークソッ  
出し足りたりねえ〜」













「ま、まだするおつもりですか？」

「お、さすがに音を上げるか？」

「……いえ、そういうわけでは……」

「あっそ。」

「じゃあまだまだお前のマン」に使わせてもらうわ」





「お前のマンコ俺のちんぽが馴染んできたな♥」

「そうッ・・・でしょうカッ・・・。」

「マン」のヒダヒダがぴったりちんぽに吸い付いてきやがる♥









「あの・・・私そろそろ帰らないと・・・。」

「ふーん。お疲れ」

「はい・・・。」

ふーん

ふーん

ドロォン

今日は久々に楽しめたわ。  
ま、さすがに今日でメイド辞めるだろうけどな。





翌日。

「おはようございます。ご主人様」

「アリス!？」

「お前辞めなかったのか?」

「え?」

「はい。」

「……マジかよ……」





「ご主人様、今日は何をすれば？」



やべー女だな、こいつ。  
まあいいや。俺が飽きるまでヒロイことしまくってやる。



「俺専属メイドの制服用意してやるからそれに着替えろ」



「かしこまりました」





「ッ……♡んッ……♡」

「エロメイド服着て庭のベンチでバイブ責めw  
恥ずかしい姿だなあアリスw」

グググ

グググ





「アリスのGスポットはどこかなーつとw」

「ッ……ふッ……♡」





「おつwこか?」

「あッ♥ッ・・・んッ・・・♥」

「オラッ! イケよッッ!」

はっはっはっ

ドクン

グッ

クッ

ううう

ぐぐぐ





「おーいッたイツたW  
すっげえ〜W  
潮吹きとか初めて見たわW」

「ッ・・・イツッ・・・♡」

シューッ

シューッ

シューッ

シューッ

シューッ



「何だ？」

「あのツ・・・♡ご主人様ツ・・・♡」

あと3回イクまでやめねえよ?」

「ッ……♡かしこまりました……♡」





「オイッ！そんな腰使いじゃ俺イケねーよ？  
もっといやらしく腰動かせ！」

「はいッ・・・♡  
申し訳ありませんッ・・・」





もっとデカ乳揺らしながら腰動かせ」

「ツッぽんッぽん」













「オイッー!!」

何お前もイッてるからって休んでんだよツツー!!」

「んツツ♥♥」

「申し訳ございませんツツ♥♥」





「俺の方から動いちまったじゃねーか  
罰としてあと俺を2回イかせろよ」

「はいッ・・・♡  
かしこまりましたご主人様・・・♡」





「あッ・・・そこを広げられるのはッ・・・♡」

「ゲツの穴見られんの恥ずかしいのか?w」

「ダ、ダメですッ」

「汚いところなので・・・」

「何?ご主人様に歯向かうわけ?」





「そ、そういうわけでは……」

「……別にお前のなら汚くなんかねえよ」

「えっ……」

「……俺何言つて……」

「クソッ……」













「今日はこのくらいにしてやる。  
俺遊びに行くからベツト掃除しとけよ」

はーっ

はーっ

「……はい。かしこまりました」

ゴッ





「今日もクソほど犯してやる」

「かしこまりました」

「……お前さあ」





「ここまで俺に好き放題させるとか、マジで何か目的あるんだろ？」  
「言ってみろよ」

「。。。」





「ご主人様・・・あなたをお慕いしているから、それだけです」

「・・・は？」





お・・・俺のことが好き？  
周りの評判最低最悪なこの俺を？

「・・・嘘だろ」





「この野郎！俺をからかいやがって……！」

「んっ……♡  
う、嘘ではない……ですっ……♡」





「うるせえ！ならアリス

お前が妊娠するまで本気でハメてやるよ！――」

「あッ・・・♡」













「妊娠しろッスアリスッスッ！」

「シ・・・心」

「俺の子を孕めツツツ!!」









「はあッ・・・はあッ・・・」

「あッ・・・♡」





散々種付けしたあの日からアリスはうちに来なくなつた。  
まあ当然だ。

その後俺は金で色んな女とやりまくつたが  
アリスとする以上に満たされることはなかった。



そんな中、滅多に俺と話そうとしないクソ親父に  
大事な話があるとかいって呼び出された。

「んだよクソ親父。。。つて。。。えッ。。。!?!」



そこにはドレスを身にまとったボテ腹のアリスがいた。

「おまッ・・・え!?!なんでここに!

てかマジで妊娠して・・・え・・・!?!」

「息子よ・・・やってくれたなあお前・・・。」

「親父!?!?どういうことだよ!?!」





「この方は△△アリス様、ウチと縁の深い△△グループのご令嬢で、お前の婚約者だ。」

「はあ!?メイドじゃ・・・」

「メイドに変装してお前の普段の姿を見たいとおっしゃってな・・・  
しかしまさかこんな事になるとは・・・  
アリス様、申し訳ございません!!」

「おじ様、謝らないでください」





「予定より少し早くなつてしまいましたが、私は△△グループの後継者にふさわしいととてもたくましい殿方との子を身ごもることができて幸せです♥」

「な。。。んな。。。」

「お前は今すぐアリス様と結婚して△△グループに入つて扱き倒すことになった。覚悟しろよ？」





「これからもよろしくお願いしますね  
ご主人様・・・いえ、あなた♡」

予想外過ぎて頭がおかしくなりそうになったが、  
初めてアリスの笑顔を見て  
俺はクソドラ息子から生まれ変わることを決意したのだった。

END